

童話・岸邊福叟名話集

倉 橋 惣 三

「鹽賣り仁吉」を始めて聞いた時の感嘆は今でも覚えてゐる。場所はどこであつたか——神田の青年會館ではなかつたかと思ふが、はつきりしない。——なんでも午後であつた。その夜、わたしはひきりで其の節々を真似してみたりしたものであつた。「鹽、しほッ、しほやァイ……」のまじりなき、自分の真似を、今でもそのまま真似をして見られるやうな氣がする位だ。この話は、この本で見る三明治四十年頃の作ミ書いてあるから、わたしは聞いたのは、初演でないにしても、その年か、離れても一二年後を出でない時のことであつたに相違ない。その頃は、此の著者のみならず、巖谷さんや久留島さんのお嘶を、いろんなまじりへ出かけて行つては聞いたもので、若いわたしも、今から思ふまじり感心であつたが、當時のお嘶運動そのものが、今から見るまじり最も新鮮な潑刺性を以て同好をひきつけたのであらう。岸邊さんは、その頃から驚くべき凝りを以て、わたし

達の耳を聳たしめたもので、「鹽、しほッ、しほやァイ……」も、その代表の一つだつたのである。著者の「お伽嘶の仕方」の理論ミ實際」が出たのも、その頃だつた。當時の若い嘶し方研究者が、みんなに熱心に、この創意に富める新著を讀んだことか。——新刊の名話集を贈られ、殊に巻末に添えてある舊著の挿繪を見て、わたしの思ひ出は、ついさんだ古い昔に飛んだ。

○ この間何十年か相立ち申候。

題して福叟名話集ミしてあるのだから、岸邊翁ミいはなればなるまい。しかも、いつまで若い翁なのであらう。あの若い日の凝りを少しも弛めないものである。三百餘の創作の中から自選二十一ミいふことが、既に仇おろそかな態度ではない。「子孫のために書き遺す」ミいふ題言ミ共に、先づ以て深き敬意にたえざらしめる。

作は、明治二十七年頃創作の「足柄山の金太郎」から、最近昭和十四年二月作の「國を護つた傷兵まもれ」に至るまで、翁の童話生涯の今日までの各時代をちりばめてゐる珠玉篇のみである。殊にその中に、宣城吳竹寮に於ける光榮の謹話「柿」「良寛和尚」「鹽賣り仁吉」の三篇のあることは、いやましに此の書を、而して、童話人として翁を飾るものである。

わたしは、此の諸作を、批評家の立場で見ると、著者さ餘りに懇親である。全巻を精讀しての感じとしては、是等の自信作を此の美しい本にまさめられたことを、著者のために、以て斯道のために、心からする喜びが第一である。しかも、それと同時にわたしを感じの底に浮んでゐるものを摘みあげて見るに、相變らずの凝り方だなあ。それにしては何んさいふう、まさであらう。さいふ感じである。更にその後ろにある感じは、心にくい程だなあ。しかし、斯の道に對する之れ程の潛心には、うまさ、に對する感服よりも、態度に對する敬服を禁じ得ないさいふ感じである。こんなことを書いてゐるに、そんなことを、今頃知るのかさいひそな著者の顔も見えて來るが、藝術家はその作技に於てその一番の本氣を立證するのが常である。——近來、子ぎものため三稱して、餘りにも非良心的な、失敬なものゝ多いのに聊か憤りを抱かされてもゐるわれ〜こし

て、この書は確かに胸を開かせるものである。

次に、この好著の紹介者として、讀者の爲に是非言ひ添えて置きたいことが二つある。その一つは、この各篇を讀むのに、是非、ゆつくり讀まれたいさいふことである。ゆつくりさいふのは、必ずしも時間的にさいふだけのことではない。一字一語を音として丹念に辿るのは勿論、句の切り方、行のかへ方に注意して、呼吸の動きを以て讀むことである。著者は、この書の中で、お話を書いてゐるのではなく、晰してゐるのである。従つて、讀者も、目に讀み、頭で解釋し、筋や意味を理解するだけでは足りない。そこに晰されてゐるまゝを、晰し手のいきづかひと共に受け取らなければならぬ。この本は、お話のたね本ではない。晰方そのものを以て讀むべきものである。唄の本、謠ひ本に譬へて正しいかきうか知らぬが、少なくとも、飛び讀みで筋だけ追つたり、棒讀みで意味だけ捉へようとしても、この書の眞の味は出ない。——この點に於て、讀者はこの特色ある童話書から、文學としての童話を與へられる以上に、口演藝術としての童話に就て、こまかく學ばせられるところがあるであらう。世に讀む童話の標本は少なくない。晰す童話の範例となるものは比較的少ない。この書は、その最も徹底的なるものである。

その二は、この書からお話の作り方のいろ／＼の場合を考へられたいこまである。二十一篇の中には、年齢に於て、それ／＼異つた話がある以外に、たゞへば、「旭トクジラ」「南洋のかに」「お日様のぼる」「スキスノユキナゲ」のやうな、實際の景物に題するものもある。「でんでん蟲」は西條八十氏の詩を、「青い鴨 月をあびるよ」は北原白秋氏の詩を、共に詩からの轉作さいふよりも、美しい詩をさうして幼き者へ語りうかの苦心に基く新しい試みである。フランダースの犬を原話させる「少年畫家 清」では、外國の話の雛案のし方に就て、「國を守つた 傷兵 守れ」では、標語の活きた與へ方としての、最も心の籠つた童話化に就て、その他、「かぐや姫」「因幡の白兔」「足柄山の金太郎」に於ける昔からのお伽噺の扱ひ方に就ても、「三羽の白鳥」に於ける「良寛和尚」等の場合に於ける意味の扱ひ方に就ても、著者は並々ならぬ苦心の結果を教へてゐる。勿論如何なる童話作家に雖も、作家良心に於て苦心しないものはないが、此の著者は、單に新しい話を作り、舊い話を書きかへるさいふだけでなく、それを自分の噺にするために、即ち、最も嚴格な意味で自分のものとするために苦心してゐる。そこに、讀者も亦、意を注いで讀まなければならぬ。噺は人の噺をたゞ口にくつすだけのこゝではない。充分自分のものになければ、噺し得るものではないのであ

る。話をさう噺そうかであるよりも、その話を、さういふ風に自分の噺にしようかである。しかも、之れは噺し方の上に於ける苦心であるに止まらず、苟も、自分の話をつくる時の苦心でなければならぬ。その苦心が此の書から學ばれる。

○ 文學としてのお話にも、いろ／＼の傾向がある。噺し方に至つては一層いろ／＼の型もあらう。斯道の三大家にせられるもの著者の他に、巖谷氏、久留島氏を比較して見ても、それ／＼流派別のやうなものを感じさせられる。そのいづれを好むか好まないかは、各人の自由に任す外はない。又、各人はそれ／＼自分の噺方を工夫すべきで、敢て先人の模倣を事すべきではない。しかし、先人には、その天分を研鑽に於て、執つて學ぶべきあると共に、後生の苦心努力の足らざるを激勵鞭打するものが少なくない。すなはち、さきと同じ書肆から刊行せられた「童話・巖谷小波名話集」、「童話・久留島武彦名話集」を併せて、此の書を、心から歓迎推薦するものである。そして、是等我國童話界の所謂三大元老との親しい交誼を、更めて深きよろこびとする。

(東京神田、東洋圖書株式會社發兌)
定價金貳圓八拾錢、送料金拾六錢